

新批評・近代日本文学の構造

3

近代文学の風土

森安理文・有山大五編

国書刊行会

新批評・近代日本文学の構造 ③近代文学の風土

昭和55年3月20日 第一刷発行

平成4年1月20日 第二刷発行

著作権者との
申合せにより
検印省略

編者 森安理文・有山大五

発行者 割田剛雄

〒170 東京都豊島区巣鴨3-5-18

発行所 株式会社 国書刊行会

電話 (3917)8287(代表)振替・東京5-65209

落丁本・乱丁本はお取替いたします。 印刷・セイユウ写真印刷 製本・青木製本

ISBN4-336-02040-X

緒言

森 安 理 文

いうまでもなく、わが国の近代文学が古い文学との絆を断ちきって、新しい出発をするためには一つの前提が必要であった。一つの仮説といってもよい。それは「近代的自我」とよばれる「個」に対する自覚を前提とし、同時にその「自我」の成長に対する満幅の信頼感からであった。従って近代文学の成長は、かかって期待された「自我」の成長にまたねばならなかった。

しかし近代文学が、この素晴らしい金字塔を仮説に掲げながら、その後どんな風にたぢろぎ、どんな地点でたちどまらねばならなかったかということは、今日ようやく明らかとなりつつある。身最良な期待のなかに誤謬もあり過失もあった。わけても大きな誤謬は、「個」に対する絶対と尊厳を先験的に認めたことであった。なるほど「個」は個であるが故に唯一絶対なものといわれ、また絶対であるが故に尊厳であるとする思考は、近代思想の先駆的な発想につながるものであって、軽々に否定することはできないが、問題は「個」を個としてはじめから独立して存在する既成事実として認めたことにあった。しかし個もまた「自我」と同様に生成発展する創造的存在であったのである。

「個」は常に先天的にあるのではない。「個」は常に時間的、空間的に流動し、変貌しながら創造されるものである。——だがこの場合、重要なことは「個」と時間及び空間との関係であって、「個」の生成発展にとって、時間及び空間は単に「個」の生成を外側から規制するものではなく、個は時間と空間のなかに、とっぷりとつかることによって醸成されるものであるということである。

この時間と空間との重層をわれわれは風土とよぶのであるから、われわれがいかな「個」であっても、われわれを

醸成せしめたこの国の風土と無縁にして絶対的な「個」など存在しないのである。同様にいかに近代的な「個」であるようにみえても、時間的に近代だけに限定された「個」などあり得ようはずもなく、また空間から離れた近代も存在しないのである。

このように「個」の成立と存在に對して、われわれのおかしてきた早計は、必然的に風土の問題に立ち入らねばならなくなつたのである。

文学についても全く同様であつて、われわれは文学を「個」として考えるためには、先ず風土のなかでとらえることから始めなければならない。

今日、近代文学における風土の考察は、形而上的に優れた多くの研究が先行しているが、具象的にはようやくその緒についたばかりである。

本書がそうした当面の課題に對し、その前駆的な役割を果たすことができれば、編者としてこれ以上の幸いはない。

Ⅲ 近代文学の風土 目次

緒言

森安理文

1

第一章 近代文学の風土と意義

近代文学における風土の成立

森安理文

9

反近代と非近代

有山大五

23

自然と反自然

廣島一雄

43

第二章 風土の重層性

都市性

長谷川泉

59

田園と辺土

石橋 學

75

北方性と南方性

関根和行

89

故郷と異郷

安田義明

105

官学と私学

吉田永宏

121

所属集団（同人雑誌）

淀野隆之

135

第一章 近代文学の風土と意義

近代文学における風土の成立

森 安 理 文

一

文学において風土を考えることは、文学が成立してくるまでの、目に見えない力としての地盤を問題にすることであって、文学として咲き競っている花々の品種分けをする作業とはおのずから違うものである。例えば花の品種からすると、ともに相容れない異種の植物でありながら、それが同じ土壌に同じ肥料によって育成された植物である事もあって、仮りにそのいずれかを別の土壌に移植すればたちまち枯死するか、或は全く別の品種の植物になってしまうこともあり得るのである。

同床異夢ということばもあって、夢はそれぞれに異なったふくらみを見せているが、所詮は同床の契りを断ちきれない場合が多いものである。風土の研究は同床の問題である。

だがこれまで風土はあまり論議されなかった。文学史なども風土の問題には殆んど触れることなく通りすぎている。しかし文学の各論は別にしても、文学史は本質的に風土の研究に礎が置かれるべきものである。しかし今日依然として、同床よりは異夢に深い関心が注がれ、品種別による花の論議が盛んである。だが文学史において異夢より同床の

研究が先行せねばならないことは、例えばわが国の「私小説」の問題一つにしばってみても、うなずけるはずであろう。これまでの近代文学史では「私小説」をその性格の上から正當に位置づけているとは思われない。即ちこの極めて日本的な「私小説」が発生するための基盤の解明も、またその特殊な発展についても、われわれを納得させてくれる史的説明はまだ見当らないのである。

だが、この「私小説」こそ実はわが近代風土の産物なのである。例えば吉田健一は、堀辰雄の『曠野』評の中で「一人の女性が、私小説的日常性から文学の世界へ完全に転置するためには『物語』の伝統を必要とした。しかし近代の風土にはその物語を育てる現実がなかつた」と述べている。「物語」の伝統がないわけではない。ただ「物語を育てる現実」が近代風土の中で喪われているのである。たとえばわれわれの周辺には本人の意図とかかわりなく、宿命としかいいようもない事件にしばしば出くわすのだが、その宿命という語でさえ、いまの近代風土には見当らないのである。

つまり「私小説」の発生する基盤を明らかにする為には、何故に近代風土が「伝統としての物語を育てる現実」を喪ったのかを問わねばならないのである。これは「私小説」だけの問題ではあるまい。異夢において欧米の花種と同一に論じられていた種々の花についても、その発芽と育成をめぐるエネルギーについては、いま一度近代風土の発掘にまたねばならないのではないか。

二

さて、文学において対象となる具体的な風土は、文学が生まれるための「ところ」と「とき」であって、この両者融合による特殊な性格と構造を明らかにして、しかもその「ところ」と「とき」に育った作者との有機的・無機的な関係を明らかにすることである。

しかし近代文学においての「とき」は、すでに「近代」ときまっているのだが、問題は「近代」という「とき」が、実は「ところ」によって必ずしも一律の融合をみせないところに「ところ」の複雑さがあるのである。わが国における「近代」をいつからとするかは難しいが、たとえその時期をいつに仮設したとしても、わが国の「ところ」による近代の相違はまことに著しいものがある。しかもその相違は、都市と山村というような時差的なものだけでなく、例えば関東地方と関西地方の様な質的な相違を見逃すことはできない。

これは特に関東と関西に限られたことではないが、卑近な例として「春」という自然的な風土のもつ「ところ」の相違について考えてみたい。「春」という語は、四季の内の一つであって、外国語のスプリングと同義語である。だが外国のスプリングと、わが国の「春」に共通しているものは、そのいずれもが冬と夏との間にある自然風土としての季節を表わしているだけであって、「春」と「スプリング」のもつ風土的内容には大きな相違があろう。また外国と比較するまでもなく、わが国のような狭い国土においても、北国の春と南国の春とは全く情趣は違っている。島崎藤村の『春』に見られるように、長い凍土の冬を地虫のように家籠りしながら春を待つ北国の人々と、南国の人々の前に訪れる春とは、同じ「春」とはいいいながら、春という自然のもつ風土性には大きな距りがある。これは「春」という風土のもつ「ところ」の地域的な相違によって生ずる微妙な感応の差であるが、更に問題はその「ところ」に「とき」が融合することによって、「春」の風土性は著しく変動する。明治時代に見られた島崎藤村の「春」は、今日果たしてそのままであろうか。

つまり、われわれが近代文学の風土について考えるとき、風土は単なる「ところ」としての自然現象ではなく「とき」との融合によって、十分に歴史的な風土性をもつ「ところ」となるのである。従って「ところ」が自然現象だけでないことにおいて、われわれの考察はけっして自然科学的であってはならないのである。

また同様に、われわれを取りまく自然的、社会的な「ところ」は、とりまかれているわれわれにとって、ただ客観的に對蹠的に存在しているものではない。そのことについて和辻哲郎は『風土』に、

……我々は寒さを感じる前に、寒気というごときものの独立の有をいかにして知るのであろうか。それは不可能である。我々は寒さを感じることに、いいて、寒気を見いだすのである。しかもその寒気が外にあって我々に迫り来ると考えるのは志向的關係についての誤解にほかならない。元來志向的關係は外より客観が迫り来ることに、初めて生ずるのではない。個人的意識について考察せられる限り、主観はそれ自身の内に志向的構造を持ち、主観としてすでに「何ものかに向ける」ものである。「寒さを感じる」というその「感じ」は、寒気に向かって、いいて、關係を起こす一つの「点」ではなく「……を感じる」こととしてそれ自身すでに關係であり、この關係において、寒さが見いだされるのである。

とし、更に「かかる關係的構造としての志向性は、寒さにかかわる主観の一つの構造にほかならぬ。」と述べている。これはわれわれを取りまいて自然、社会的な風土と、われわれの個々における關係を述べたもので、その關係を「志向的体験」として位置づけたものである。即ち「風土」は、われわれにとって、外側にある客体としての存在ではなく、われわれの側から働きかけるときにはじめて両者の關係は存在としての意義を持つことができるのである。しかし働きかけるといっても、働きかける側は、われわれというよりもわれわれの中のひとりひとりであって、そのひとりの個において働きかけるのである。何故ならば働きかける個は、それぞれの個において異なっているし、また異なっているからこそ「風土」は主観的な存在たり得るといえるのである。

しかし「風土」がいかに個において働きかける主観的存在であっても、「風土」論を文学的な対象とするためには、われ一人の問題から、「われわれ」の問題に転位させねばならないことも、また当然であろう。和辻博士の「風土」論も、むしろそうした「われわれ」の問題として捉えられており、特に「芸術の風土的性格」として、「われわれ」の前に風土によって規定された芸術的な様式を例としてあげている。「われわれ」が、風土によって規定されたいろいろの様式を共有していることは確かであって、たとえばイギリス人のもつ「ソネット」や、わが国の「短歌」、「私

小説」などは間違いもなく、それぞれ固有の風土によって醸成された共通の文学的様式であろう。

「われわれ」が、ことごとく風土の中で風土化していることは、すでにヘルデルも認めており、ヘルデルによれば「われわれ」の精神も性格もすべて風土的であるとされ、「われわれ」の精神の風土的な構造として、一に感覚が風土的であり、二に想像力が風土的であり、三に実践的な理解が風土的であり、更に感情や衝動が、また幸福までも風土的であるとしている。

これらはすべて風土と「われわれ」という特定の民族との間における芸術上の制約的な関係の規定であろうと思われる。このように「風土」への思考は、終局的には「われわれ」という団体における対象として論じられるのであるが、同時に近代文学における作家研究にあつては、「われわれ」としての共通の「風土」に対する個々の「志向的体験」を通じて「われわれ」と「わたし一人」との関係を究明せねばならないのは当然であるといえよう。

三

さて、私に与えられた「風土」論は、近代文学における風土の成立であるから、具体的には「われわれ」の働きかけによって生ずる「風土」の構造と機能とを、そしてその機能によって「われわれ」が得ている各種の文芸様式について考えればよいと思う。だがそうしたわが国の「風土」にふさわしい文芸様式ができあがるまでには、先ず「われわれ」が「風土」によって醸成された、あらゆる感情、思考、衝動、行動等の中に、多分統一された類型的な精神と行動のパターンのいくつかがあるはずである。つまり「ところ」のもつ風土的な特殊性が、そこに住む人びとにどんな特殊な感情や性格を与えてきたかということが第一であり、更に第二として、その特殊な感情や性格から生まれてくる文学は、どのような特殊性を具えているかということである。

しかし重要なことは、「風土」から抽出される人々の感情や性格と、その感情や性格から生まれる文学とでは、同

じ方法で測定できないということである。即ち第一の果実は、母胎の「風土」に対して、極めて直接的な因果関係を持つているが、第二の果実は必ずしもそうとはいえないのである。つまり感情や性格がそのまま文学に反映するのではなく、文学が文学となるためには、文学的な演出とでもいべき屈折を通過せねばならないからである。わかりやすくいえば、かりに湿度の高い風土から陰気な感情がつけられるということは原則論として認められるであろうが、問題はその陰気な感情から直ちに陰気な文学が生まれるということにはならないのである。

つまり陰気な風土であろうと、陽気な風土であろうと、文学が文学となるためには、これまで文学が文学となるために通ってきた伝統の波を潜らなければならないのであって、たとえば近代文学がどのように近代の「風土」を呼吸していても、文学が文学となるためには、やはりこの伝統のもたらす演出的な屈折を経なければならぬのである。

近代文学が近代という「とき」と、近代における特定の「ところ」とに依った文学であることは論をまたないが、「とき」が近代のいつであらうと、また「ところ」が近代のどこであらうと、文学が文学となるための伝統的な屈折から免れることができないということは、近代文学が近代的な風土の産物であると同時に、近代であらうとなかろうと、おしなべて日本的な風土の産物であることを忘れてはならないであらう。

そのためには、先ず「とき」を含めて「ところ」のもつ「風土」の日本的な特殊性から考えねばならない。先述したように、わが国の近代という「とき」を、厳密にいつからにするかという論拠は今日なお曖昧である。しかし私はここで近代という語を歴史的、社会的な意味において的確を期そうとは思っていない。何故ならば近代という語は、十分に近代という時代や社会が存在し、その存在に照らしてあとから名づけられたものではないからである。それは多分に「かくあるべき」だとする概念にすぎないのであって、その概念に少しの誤差もなく合致する時代や社会が現実の歴史の中に存在しているというわけではないからである。

従って、たとえばわが国の近代を明治以降としても、あるいは大正以降としても、それが仮設であることにおいて一向に差し支えないことであって、ただ現実的には明治以降の近代が「かくあるべき」とする「近代」の概念の上